



西地区（旧西有田）の 窯業〔前編〕



西地区の景観

有田町内では、これまで66か所の窯跡が発見されています。そのうち53か所が旧有田町域である東地区に集中しており、旧西有田町域である西地区に所在するのは13か所に過ぎません。現在も製陶が盛んな東地区の窯業や窯跡については、これまでさまざまな場面で取り上げられ、活字や映像などでも多く紹介されてきました。しかし、西地区についてはほぼ触れることがなく、一般的にはほとんど実態が知られてきませんでした。そこで本館報では2回に分け、西地区の窯跡の成立やその背景にある窯業についてご紹介してみたいと思います。

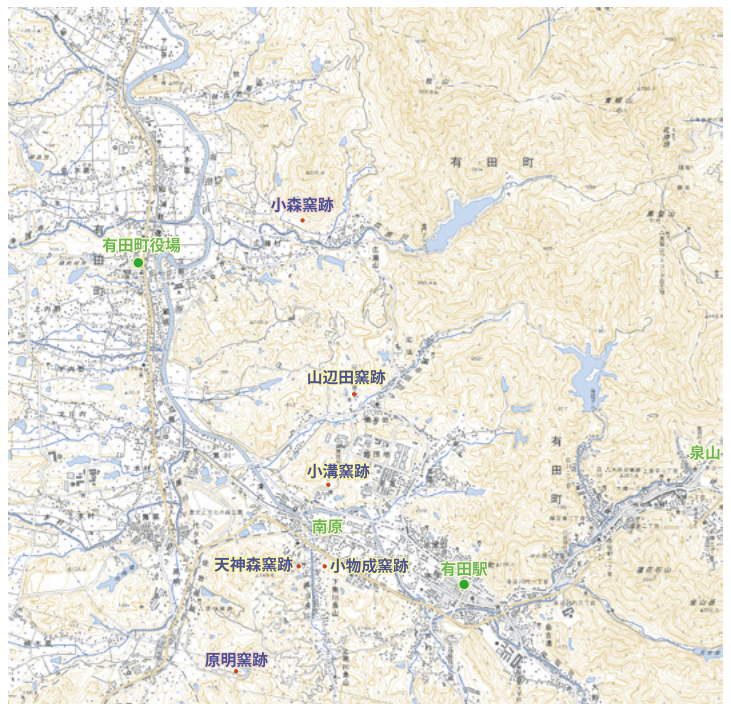
有田町は、なだらかな玄武岩の斜面の広がる西側の国見山系と、流紋岩の岩山が入り組んだ地形を形成する、東側の黒髪山系に挟まれた場所にあり、両山系の間に広がる平野や国見山系側の傾斜地を中心に、原始・古代から人々の生活が営まれてきました。一方、黒髪山系側では岩山の間の小平野は一部活用されたものの、後に窯業の中心地となる東地区の東部は、近世以前にはまったく人々の生活の跡は残されていません。

かつて有田郷と呼ばれた有田の地は、家臣の領地の3割を返上させた慶長16年（1611）の三部上地で佐賀本藩領となる前は、豊臣秀吉の命で武雄の後藤家信に与えられていました。窯業は後藤領であった1600年代にはじまっており、当初は黒髪山系側の小平野である南原地区に、小溝上窯や天神森窯が開かれました。文禄・慶長の役（1592～98）の際に朝鮮半島から渡来した陶工たちによるもので、伊万里の窯場で製陶の後、有田に移り住んだものと推測されます。

南原の地が選ばれたのは、両山系間の平野や国見山系側の傾斜地はすでに地元民によって農耕地

として利用されており、そこに直接入り込む余地はなかったからだと考えられます。しかし、当時の肥前は唐津焼の産地としてようやく全国に知られるようになったとはいえ、まったく新興の窯業地で、まだ窯業だけで生計を立てることは難しかったのです。そのため、登り窯の築ける丘陵とともに、小さくとも必ず農耕の行える平地が不可欠だったのです。

その後、南原地区を中心に周囲にも窯場が開かれるようになり、西地区にも小森窯跡や原明窯跡などが築かれたのです。こうした新しい窯場も、南原地区と同様に、すべて黒髪山系側の小さな平野を伴う場所にあり、平地に工房を構え、丘陵斜面に登り窯を築いて陶器生産が行われました。（村上）



磁器創始以前の窯跡分布

令和5年度『全国重要無形文化財保持団体協議会 佐賀・有田大会』に向けて～ 番外編

令和5年度に開催される大会に向けた連載の番外編です。10月27日・28日に行われた「全国重要無形文化財保持団体協議会 岐阜美濃大会」へ参加したので、その詳細を報告したいと思います。

この全国重要無形文化財保持団体協議会（以下、全重協）は、全国に16ある重要無形文化財保持団体と、その保持団体が所在する市町村で構成される協議会で、年に一度、順番に大会と「日本の伝統美と技の世界」と題した秀作展（展示会）を受け持って開催しています。本来ならば、この美濃大会は令和2年に開催されているはずでしたが、「コロナ禍」により長らく延期となり、ようやく2年ぶりに開催されました。

開催地の美濃市とは

まずは、今回の会場となった美濃市について紹介したいと思います。岐阜県美濃市は、日本のほぼ中央に位置しており、豊かな自然と清流長良川を有する人口約2万人の市です。美濃市の文化はこの清流のもとで生まれ、例えば、長良川から取水する^そ曾代用水は平成27年に世界かんがい施設遺産として登録され、「清流長良川の鮎」は世界農業遺産に認定されています。

さらに、1300年の伝統を誇る「美濃和紙」をはじめ、「うだつがあがらない」という言葉の語源といわれる、隣家への延焼を防ぐために屋根上に築かれた防火壁で、のちに装飾的な意味合いが強くなった「うだつ」が現存する町並みなども有名です。これは「うだつの上がる町並み」として国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、毎年美濃和紙あかりアート展が開催され、歴史ある町並みと和紙が融合した幻想的な雰囲気醸し出しています。



うだつの上がる町並み



美濃和紙あかりアート

美濃和紙と本美濃紙保存会

美濃和紙の歴史は、奈良の正倉院に所蔵されている、1300年前の戸籍用紙まで遡ることができます。江戸時代には高級障子紙として「美濃判」の名称が障子紙の規格として知られるようになり、さらに幕府の御用紙となるなど、その名声を高めていきました。美濃和紙の中で、原材料は勿論、伝統的な製法や用具によって作成するなど、指定の要件を満たしたもののだけが「本美濃紙」と呼ばれて区別されています。その特徴は白く美しく、柔らかくて強いというもので、陽に透かすと、繊維が整然と美しく絡み合っているのが分かります。本美濃紙保存会は本美濃紙の技術保持団体として、原料の調達から紙すき、選別までの全工程の丹念な仕事を、厳格に守り継いでいます。



紙漉きの様子（美濃市提供）

大会

2年ぶりの開催となった本大会は、27日、オープンしたばかりの「美濃市健康文化交流センター」にて開催されました。まず全重協会長である久留米市長（代理 副市長 橋本政孝氏）、全重協岐阜美濃大会会長である美濃市長武藤鉄弘氏のあいさつにはじまり、文化庁の奥健夫氏などからお言葉を頂戴しました。さらに長年の功績をたたえて、越後上布・小地谷縮技術保存会より2名、本場結城紬技術保存会より1名、輪島塗技術保存会より3名、計6名の技術保持者が表彰されました。

続いて「重要無形文化財本美濃紙保存会の活動について」と題した講話が行われ、会員である倉田真氏が、本美濃紙保存会の会員数（技術保持者）や技術を受け継ぐ伝承者（研修者・研修生）が僅かながら増加したこと、しかしながら伝承者も40・50代が多く若い人が少ないこと、原材料や紙漉きに必要な用具の製作者も高齢化が進んでいる問題を挙げ、解決のために保存会で用具の製作者を育てるといった保存会全体のスキルアップや、様々な情報共有に努めていることなどを話されました。全重協保持団体の多くが、同じ問題に悩まされていることもあり、本美濃紙保存会の取り組みに



令和4年度功労者表彰



松尾佳昭
有田町長の挨拶

対し、活発な質疑応答が交わされました。

大会の最後に、次期開催地である有田町が紹介され、松尾佳昭町長が登壇し、やきものまち有田の魅力や、次年度の記念大会に向けた意気込みを熱く語りました。

秀作展・視察研修

全国16の重要無形文化財保持団体が、自己の伝統技術を駆使して制作した作品を展示する秀作展「日本の伝統美と技の世界」は、人口約40万人の大都市、岐阜市の中心にある「みんなの森 ぎふメディアコスモス」にて行われました。ここでは図書館や交流センター、展示ギャラリーなどからなる複合施設で、常に人が集まる場所です。全重協保持団体の拠点は、交通の要所でない場所で生まれていることが多いため、秀作展ではできるだけ多くの方に、伝統の技と美を一度に見て頂きたいという願いのもと、商業活動の中心地などで実施しています。先日は木村拓哉氏が織田信長に扮して一躍話題となった「岐阜市産業・農業祭～ぎふ信長まつり」のパレードも、今回の秀作展会場前の道路で開催されました。

このような場所で開催された秀作展は、地元美濃市の高校の書道部が揮毫した題字のもと、各保持団体の技術の粋を凝らした作品が並び、さらに美濃和紙の手漉きの技が実際に披露されました。他にも本美濃紙を使用した岐阜提灯作りの実演と作品展示も、伝統工芸として併せて紹介されました。

翌28日の視察研修では、廃校を再利用した「美濃和紙用具ミュージアムふくべ」や、本美濃紙保存会の本拠地でもあり、一般の方も紙漉き体験や和紙について知ることができる「美濃和紙の里会館」にて美濃市の歴史や民俗を学びました。さらに数件の美濃和紙工房、それも代々続く工房だけでなく、最近独立した伝承者によって作られた新しい工房にも赴きました。参加者は、伝統を受け継ぐことの難しさを再確認し、新しい工房の設計などについても質疑応答を交わしていました。

佐賀・有田大会に向けた準備の状況

さて、ここで有田町の状況についてお知らせします。来年度開催する佐賀・有田大会は、全重協第30回の節目となることから、記念大会として開催される運びとなっています。そこで、有田町が国立大学法人佐賀大学と包括連携協定を結んでいることから、初の試みではありますが、大学という外部組織と協力して、大会及び秀作展を行いたいと考えており、その準備を進めています。特に佐賀大学芸術地域デザイン学部は、芸術を通じた地域創生に貢献する人材育成を目標に掲げており、まさに地域に根差した匠の技と美を現代に伝えている全重協の保持団体と協力することで、互いに新しい視点の発見や、よい影響を与え合うことを期待しています。さらに秀作展会場を佐賀大学が有する佐賀大学美術館で開催することで、若い世代の方々に関心を持っていただくきっかけになればと考えています。

このように佐賀大学と保持団体の大きな協力のもと、昨年度より活動が始まっています。今回の佐賀・有田大会のメインコンテンツとして、有田が有する2団体「柿右衛門製陶技術保存会」と「色鍋島今右衛門技術保存会」の姿を、若い学生の目線によるドキュメント風の映像で表現したいと思います。そのため有田に所在する保持団体である柿右衛門窯と今右衛門窯にて、12名の学生たちが、実際に作陶や絵付けなどを体験する組と、その様子を撮影する組に分かれて3日間活動しました。現在はその編集作業を行っているところで、来年の佐賀・有田大会での公開をどうぞご期待ください。なんと14代今泉今右衛門氏と15代酒井田柿右衛門氏に、赤裸々な質問をなげかけた秘蔵映像もあるそうで、私達も完成を楽しみにしています。

大会と秀作展については、まだ未確定の部分も多々ありますが、記念大会にふさわしい、有田らしいものをお見せしたいと思っています。ぜひ、令和5年度開催の全国重要無形文化財保持団体協議会佐賀・有田大会及び秀作展へお越しくください。



みんなの森
ぎふメディアコスモス



展示会場の様子



美濃和紙用具ミュージアム
ふくべ



今右衛門窯にて作陶体験



柿右衛門窯にて作陶体験



企画展のお知らせ

近年、有田町歴史民俗資料館には、図案（やきもの
のデザイン画）や、かつて絵付け道具の第一線として
活躍していたゴム印などを大量にご寄贈いただいで
います。そこで、美しい有田焼の彩りに欠かせない、こ
れらのデザイン画や絵付けの道具類を紹介する企画展
を開催いたします。

タイトル：やきもののいろいろ
～デザインと道具たち(仮)

期 間：令和5年2月4日(土)～3月5日(日)

場 所：有田町泉山一丁目4番1号
有田町歴史民俗資料館
東館・有田焼参考館

開館時間：9時～16時30分

入館料：会期中無料

会期中無休

※2月1日(水)～3日(金)、3月6日(月)～8日(水)は、
展示替え作業のため臨時休館いたします。詳
しくはHP(下記URL参照)で紹介しますので、
ご覧ください。



旧田代家西洋館を 活用しませんか？

有田町幸平に所在する旧田代家西洋館は、明治初期
の擬洋風建築の特徴を遺した貴重な現存例で、国の重
要文化財に指定されています。令和2年の豪雨被害に
より西側壁面が崩落していましたが、令和4年3月に
修復が完了し、現在は土日祝日と春の陶器市、秋の有
田陶磁器まつりの期間中、午前10時から午後4時ま
で開館(無料)しています。



花と器で彩られた西洋館2階の様子

この建物は、休館日には一般の方々への貸し館も行
っています。例えば、先般の秋の有田陶磁器まつり期
間中(令和4年11月19～23日)には有田・華道部
と有田陶芸協会による「西洋館を彩る花×器」展の会
場として使用されました。他にも婚礼や成人、七五三
といった記念写真の会場としてもご利用いただいで
います。使用料は3時間につき1,570円で、利用日の2
週間前までにお申し込みください。予約状況によりご
希望に添えない場合もございます。詳しくは文化財課
(☎0955-43-2899)までお電話ください。



当館の展示解説について

有田町歴史民俗資料館東館・有田焼参考館および有
田陶磁美術館は、しばらく新型コロナウイルス対策の
ため、展示解説を中止していましたが、このたび完全
予約制により再開させていただきます。展示解説をご
希望の方は、**希望日の1週間前までを目途にご予
約下さい**。詳しい手順につきましては、☎0955-43-
2678までお電話いただくか、HP(下記URL参照)でも
公開していますので、ぜひそちらをご覧ください。

なお、観覧希望時のみに開館している有田町歴史民
俗資料館西館につきましても、同様にご予約下さいま
すようお願いいたします。



博物館実習生の 受け入れについて

近年、有田町歴史民俗資料館および有田陶磁美術館
にて、博物館学芸員資格取得に必要な「博物館実習」
を希望する学生からの問い合わせが増加していること
を受け、このほど、「令和5年度博物館実習生申込要綱」
を作成いたしました。

詳しい手順につきましては、☎0955-43-2678まで
お電話いただくか、HP(下記URL参照)でも公開して
いますので、ぜひそちらもあわせてご覧ください。

季刊『皿山』

通巻136号(令和4年12月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL: <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>